

第2回研究会 日付：令和4年9月16日(金)

大学体育会の強化の実際 —大学職員と指導者の両立—

挨拶・講演 佐藤 満 氏 (専修大学スポーツ研究所所長、経営学部教授)

講演 佐々木 優一 氏 (専修大学男子バスケットボール部監督 (第71回関東大学選手権大会 優勝))

西山 慶太 氏 (専修大学馬術部 監督 (第57回関東学生賞典障害馬術競技大会 団体4位))

総合司会 富川 理充 (商学部教授)

富川：2022年度第2回 専修大学スポーツ研究所の研究会を始めさせていただきます。テーマといたしましては「大学体育科の強化の実際 大学職員と指導者の両立」ということで、職員として勤務しながら、体育会の強化に携わるお二方を今日はお呼びしています。

最初に所長の佐藤満よりご挨拶、その後海外留学等の経験から海外の大学スポーツの状況に関する情報提供をいただきながら、佐々木先生、西山先生と続けていきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

佐藤所長：こんにちは、所長の佐藤と申します。よろしくお願いいたします。今日はバスケットボール部監督の佐々木優一さんと馬術部監督の西山慶太さんにお話を頂きたいと思えます。お二人ともお忙しい中、快くお引き受け下さいまして有難うございます。皆さん大変楽しみにしておりますので、本日は何卒宜しくお願い申し上げます。その前に、私の方からアメリカのペンシルベニア州立大学に2年間留学していた大学スポーツの紹介と、UNIVAS、日本版NCAAについて簡単に紹介し、その後にお二人からお話を頂ければと思います。

①専修大学とアメリカのスポーツ施設

今回、スポーツ施設について専修大学ホー

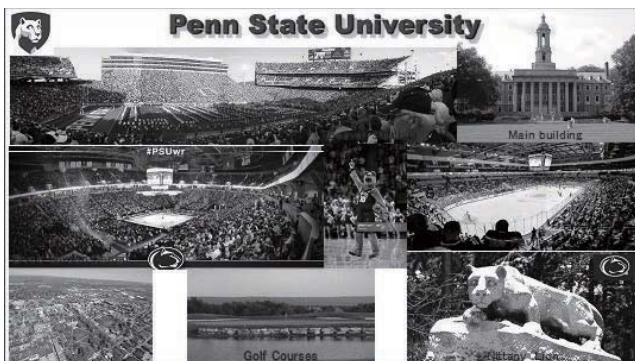
ムページから写真を検索しました。生田キャンパスの総合体育館にはアリーナ、トレーニング施設、プールなどあり、他の施設ではテニスコート、サッカーなどに使う北グラウンドがあります。伊勢原キャンパスには野球場、陸上競技場、ラグビー場などがあります。

こちらは私が1995年、96年の2年間コーチしていたペンシルベニア州立大学です。キャンパス内の敷地は一周4キロほどあり、その中には当時9万6千人収容のアメリカンフットボール専用スタジアムBeaver Stadium (現在10万人収容)があります。スタジアムは試合のみの使用であり、練習は屋外練習場とその隣に直線100m以上の屋内体育館Holuba Hallが完備されています。このHoluba Hallは、全米チャンピオンに輝いた収益で建設されています。屋内で開催されるバスケットなどの体育館は、私が留学時の1996年に1万5千人収容可能なアリーナが完成しました。完成前は50年以上経過しているレクリエーションホール(通称：レクホール)と呼ばれる6千~8千人収容規模の体育館で行われていました。レクホールは50年以上前からプレスルームやトレーナーズルーム、カンファレンスルームなどさまざまなイベントに対応できるように完備されていました。レスリングの試合は主にこのレクホールで開催され、強豪大学との試合では立ち見となる人気で盛り上がりました。当時、アリー

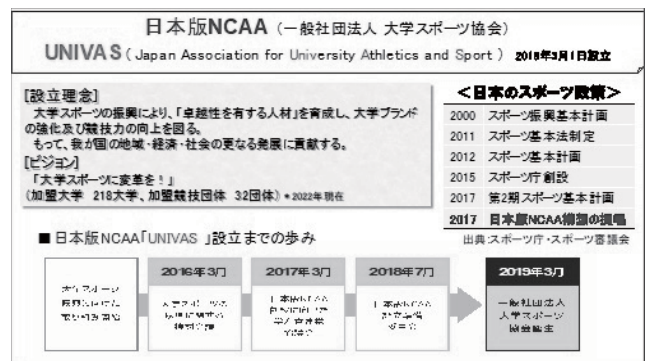
ナが完成した際のこけらおとしのレスリング学校対抗戦には、1万2千人を超える観客が入りました。卒業式にはクリントン大統領が参列、全米の州知事のカンファレンスやNBAのプレシーズンマッチはマイケルジョーダンがプレーしたり、イーグルスの復活コンサートなども開催され、大学がひとつの街として機能していました。

キャンパス隣にはゴルフ場が18ホール2コース合計36ホールあり、練習ホールも6ホール備えていました。当時、学生は年会費300ドルでプレーが可能であり、私も留学生扱いのため年間300ドルでしたが、多忙のため頻繁にプレーする時間がありませんでした。テニスコートは数百名収容のセンターコートがあり、また学生が自由に利用できるコートは数えきれないほどあります。他にも野球場やアイスアリーナ、多くの競技が利用できる多目的なアスレチックフィールドなどの施設があり、スポーツ施設は毎年バージョンアップされていました。

ペンシルベニア州立大学は全米でも有数のスポーツに力を入れている大学であり、本当に素晴らしいスポーツ環境です。視察したインディアナ大学やノースキャロライナ大学などもキャンパスは似た感じではありますが、私が見た数多くの大学ではペンシルベニア州立大学が一番スポーツ施設が充実していました。チ



スライド1



スライド2

チャンスがあれば是非視察に行ってください皆さんも感銘を受けると同時に羨ましく感じると思っています。

(スライド：1)

②日本版NCAA「UNIVAS」

今回の研究会にあたり、日本版NCAA「大学スポーツ協会」(UNIVAS)とアメリカNCAAについて簡単に説明させていただきます。

そもそも日本の大学スポーツは、競技ごとに学生連盟などが主体となり、各競技団体独自のレギュレーションや管理体制のもと大会やリーグ戦の運営を行ってききましたが、大学における運動部活動は、大学内でみるとあくまでも学生たちの自主的な活動であり、大学自体の関与はほとんどないケースが大半です。学内でも競技横断的に全学的にスポーツ分野の取組を一体的に行う部局を置いていない大学が多いのが現状です。つまり、部ごとに学生による運営とOB・OGのボランティア的なサポートで成り立っているのが実情です。こうした自助努力によって発展を遂げてきたことは日本の大学スポーツの誇れる部分であるとも言えるかもしれません。

その一方で、運動部活動に属している学生たちには、本分であるはずの学業に費やす時間を十分に確保できないという問題があります。また、知識不足や情報不足、体制の不整備などに起因した事故やけがへの対応、学生の安全を守る体制、また運動部活動が大学の管理外であるがゆえの会計制度の未整備といった種々のガバナンスに関する問題も生じています。学生にとっても大学にとっても、リスクマネジメントの観点から多くの課題があることが見えてきました。こうした課題の要因は、大学スポーツ全体を統括する組織が存在しないことにあります。おそらく本学ではこの役割も指導者が担っているのではないのでしょうか？

その中で職員や教員の皆さんが学生の管理

をどうするかという時に、ボランティアではその指導がなかなか厳しく限りがあり、授業とスポーツの文武両道が達成できていないところが多々出てきます。アメリカでは全てルール作りされて整っていると感じられます。その面も含めてUNIVASが立ち上がっているのではないかと思います。

(スライド：2)

第二期のスポーツ基本計画の中で、スポーツを「する」「みる」「ささえる」という視点から、UNIVASでもWE PROMOTE UNIVERSITY SPORTSとして、スポーツをする・体験するPlaying、スポーツを応援する・見るWatching、そしてスポーツを支援するSupportingといったことも書かれております。大学スポーツ振興に向けた基本的な方針を示す一方、課題を抱えながら実際は現場に降りてきている。この辺がおそらく本日の佐々木さん、西山さんお話の中で、いろいろ出てくるのではないかと期待しております。

(スライド：3)

日本版NCAA、UNIVASの役割として3つの柱「学業充実」、「安全安心」、「事業マーケティング(大学スポーツのビジネス化)」を新しいサービスの提供として挙げています。NCAAはほとんどビジネス化されていて、マーケティング

も進んでいます。

UNIVASによって、学生や大学にとってより良いスポーツ環境の整備が期待されていますが、気になるのが指導者への環境の整備や財政面などのサポートが見えてきません。安心安全には指導者への各種研修の実施がありますが、この研修に対して誰が受講する環境や財源を用意するのでしょうか？指導者へのサポートが全く足りていない現状が大変残念だと思っております。

(スライド：4)

このスライドは「大学スポーツ振興の社会的意義」についてですが、学生スポーツの価値を上げるには指導者の資質の向上はより求められます。同様に「指導者の重要性はより増してくる」こととなります。

大学スポーツ振興の社会的意義ということでは、選手のために、育成のために一番大切なのは指導者ではないかなと思うのですが、指導者の資質向上のためには研修は必要かもしれませんが、同時にその活動を支える指導者の環境整備も重要性が非常に増してくると思っています。そういう視点から今日のテーマの研究会は意義のあることなのかなと思っております。

(スライド：5)

スライド3

スライド4

スライド5

③他大学の戦略

立命館大学では、びわこ・くさつキャンパスを1998年4月設立しました。私の大学院同期で、現在、立命館大学の副総長をしている伊坂忠夫先生がおります。1995年にアメリカのジョージア工科大学（ジョージアテック）に留学したときに、NCAAのカレッジスポーツに対して非常に感銘を受けられました。「カレッジスポーツのメッカを目指して」をサブテーマとして掲げ、スポーツ強化センターを立命館大学にも設立したいと尽力されました。重点強化クラブも選定し、専属の監督・コーチを雇用しています。また活躍しているクラブや強化に対してはさまざまな助成金、奨励金、奨学金なども提供しています。

専修大学は、立命館大学と比較しても、事務方の人数は比較的多いと思われ、実現も不可能ではないのでは。大学スポーツ活性化、スポーツの価値を高めていくためには、優れた人材（選手・指導者）の育成に対しても、しっかり自分たちの中でも認識しながらやっていく必要があると感じております。

一方、東洋大学では日本代表の強化拠点であるHPSC (High Performance Sport Center)、NTC (National Training Center) に徒歩5分の場所にスポーツセンターを設置する戦略を立て、水泳萩野公介選手獲得のために北島康介を育てた平井監督、陸上桐生祥秀選手獲得のために元五輪代表土江監督を東

洋大学教諭として招聘しました。両指導者は日本代表コーチとして指導していました。特に桐生選手は「環境面」が決め手となり、東洋大学へ進学したと言われています。東洋大学は指導者を含めた環境を整え、大学の広告塔にも利用できた成功例とも言えます。

(スライド6、スライド：7)

④ NCAA

「NCAAの目的は、学生スポーツ選手のために、大学のアスレティックス・プログラムを創設し、発展させ、改善して、教育的リーダーシップ、フィジカル・フィットネス、そして運動競技能力の優秀性を引き伸ばし成長させることである」と書かれております。

UNIVASの3つの柱は「学業充実」「安全安心」「事業マーケティング」ですが、NCAA3つの柱は「ACADEMICS(学業)」「WELL-BEING(安全・健康)」「FAIRNESS(公平性)」となっております。最初2つの柱は同じですが、UNIVASは3つ目に「事業マーケティング」となっております。しかし、NCAAでは「公平性」が挙げられ、大変厳しいルールのもとで行なっております。日本の場合は各競技の選手枠についても各大学バラバラです。NCAAは本部がしっかり運営管理し、全大学をディビジョン1・2・3で区分してスカラシップの数を基準に振り分けられるようにしています。各大学にはアスレティ

ック・デパートメント (Athletic Department)、UCLAなどはレクリエーション・デパートメントとしていますが、学内のスポーツ全体を統括する組織を配置して統括しています。

(スライド：8、スライド：9)

UNIVASも各大学における統括組織を強く望んでいますが、現状ではまだまだ各大学において整理されていません。特に現場の指導者に関しては、統括組織の中で最も重要な役割を担っているとして位置付けられなくてはならないと思います。NCAAルールではコーチは4名が契約することになっています。有給は3名、無給はボランティアコーチ1名。私がペンシルベニア州立大学留学期間中の2年間はボランティアコーチをしておりました。フットボールやバスケットボールは例外です。NCAAでは両スポーツがスポーツビジネスとして成立しており、その収益から他競技のコーチをたくさん雇用できるようになっています。アメフトで言えば、オフenseコーチとディフェンシブコーチなど、いろいろ細分化・専門化されて分かれてより多くのコーチが配置されます。(スライド10)

また、種目別奨学金授与人数の上限というルールもあり、各大学が授与することのできるスポーツ奨学金の数は、大学が所属するDivison

スライド6

スライド7

スライド8

スライド9

や競技ごとにNCAAにより細かく規定されています。例えば、女子サッカーの場合、Division Iの大学は14人分、Division IIの大学は9.9人分のスポーツ奨学金の授与が認められています。1人分の奨学金の額は、フルスカラーシップの額を基準に算出されるため、14人分のスポーツ奨学金の額というのは、授業料、寮費、食費、その他の諸費用全ての合計の14倍となります。ただし、この額を14人で分けなくてはならないというわけではなく、より多くの人数で分配することも可能です。一部の競技では、奨学金の数と同人数に分配することがNCAAにより義務付けられていますが、これらの競技をヘッドカウンスポーツと言います。大学の収益源であるアメフトは最大85名、男子バスケットは最大13名である。女子ではバスケット15名、バレーボール12名(男子4.5名)、テニス8名(男子4.5名)、体操12名(男子6.3名)。ヘッドカウンスポーツではないが、サッカーは男子9.9名、女子14名となっており、他の競技も総じて女子の枠が多くなっています。これは「Title IX」というルールがあり、「男女の競技者数を同じにする(男女平等の理念)」を基本としていることからですが、男女学生の興味、能力の整合性から男子競技へのサポートに対しては議論の余地があると考えます。

(スライド11)

これはNCAAのフットボールとバスケット

のコーチの年俵です。各大学の支出としてコーチ・スタッフの経費が一番高いのです。佐々木監督は関東チャンピオンになりましたから、NCAAでしたら億万長者です。例えばこの10分の1でもと・・・。

(スライド12)

佐々木監督：10分の1でも凄いですね。

佐藤所長：と言うほど、NCAAにおける大学の役割では、部活動の運営を中心にしながら、監督・コーチの雇用や練習日程の設定、部活動の予算管理、メディア対応、学生アスリートの成績管理など、多岐にわたって支えていく必要があります。単なる部活動の支援ではなく、環境づくりのためにもスポーツを経営の一つとして用いて「お金を生み出す」ということが重要となります。

以前、JOCの調査からUCLAは1984年ロサンゼルスオリンピック男子体操で学生が金メダルを獲得したものの、お金にならない競技として廃部になっています。スタンフォード大学ではレスリングなどの競技が廃部危機になり、それをレスリングOBだけで13億5000万円を集め廃部を阻止しています。日本のOBですと「口は出すけれど金を出さない」ということも多いと思われれます。

最後に私が留学時のPen State Wrestling

(ペンステート・レスリング) チームの強化サポートです。NCAAのサポート体制は50年以上前から財政、施設面から日本の大学と比較にならないほど整備されています。また、大学が管理する競技に対しては、予算から医科学を含めて手厚いサポートがあります。日本はナショナルチームが20年前からようやくJISS,NTCが整備されて、サポート体制ができてきている状況ですが、大学は皆無に近いほど寂しい環境と皆さんが感じていると思います。各チームにはオフィスが設けられ、ヘッドコーチ、アシスタントコーチ、コーチアシスタントの部屋があります。特にヘッドコーチの部屋は大学教授以上の広さがあり、各クラブの秘書が事務的な処理を全てやってくれます。専修大学では全てがボランティアである我々指導者が援助金や出張などの願い書、チームの事務的なマネジメントをしていますが、NCAAは車の手配から何から何まで全部やってくれます。(スライド：13)

以上、日米大学のスポーツ事情、環境の違いをまとめもなく話しましたが、本日は大学職員という立場で時間の制約がありながら、それぞれの部活動の指導に奮闘されているお二人に、テーマ「大学体育会の強化の実際 大学職員と指導者の両立」についてお話し頂ければと思います。宜しくお願いします。ありがとうございました。

■スポーツ(体育)局(Athletic Department)
 ... 学内のスポーツ全体を統括する組織、経営管理の部署

●規約対応「Compliance(法令順守)」
 ... 各大学がNCAAルールの専門家や弁護士等を雇用
 ◆アスレティック・ディレクター(Athletic Director)
 ... 組織の最高責任者(学長・理事長の直轄)

●役割
 ・企画、運営業務「Business Development」「Marketing」
 ・NCAAの規約対応「Compliance(法令順守)」
 ・現場指揮「Coaching」... 複数の部署から構成

※監督・コーチの雇用や練習日程の設定、部活動の予算管理や、メディア対応、学生アスリートの成績管理など、多岐にわたって大学スポーツを支えている。本部であるNCAAと各大学の部活動をつなぐ役割

●コーチ(4名)・・・契約制
 ✓ヘッドコーチ(有給)
 ✓アシスタントコーチ(有給)
 ✓コーチアシスタント(有給)
 ✓ボランティアコーチ(無給)

※フットボール、バスケットボールは例外で、数多くのコーチを雇用できる。

スライド10

＜種目別奨学金授与人数の上限＞

	Men		Women	
	Division I	Division II	Division I	Division II
Archery	n/a	n/a	5	9
Badminton	n/a	n/a	5	10
Baseball	11.7	9	n/a	n/a
Baseball Softball	13	10	15	10
Bowling	n/a	n/a	5	5
Rowing	12.6	12.6	18	12.6
Equestrian	n/a	n/a	15	15
Fencing	4.5	4.5	5	4.5
Field Hockey	n/a	n/a	12	6.3
Football (D-I)	85	36	n/a	n/a
Football (D-II)	85	33	n/a	n/a
Golf	4.5	3.6	6	5.4
Gymnastics	6.3	5.4	12	6
Ice Hockey	18	13.5	18	18
Lacrosse	12.6	10.8	12	9.9
Rugby	n/a	n/a	20	20
Rifle	3.6	3.6	n/a	n/a
Roller Skating	n/a	n/a	12	12
Skating	6.3	6.3	7	6.3
Swimming	9.9	9	14	9.9
Softball	n/a	n/a	12	7.2
Soccer	n/a	n/a	12	9
Synchronized Swimming	9.9	9.1	14	8.1
Track and Field	n/a	n/a	5	5
Team Handball	n/a	n/a	10	12
Tennis	4.5	4.5	6	6
Volleyball	4.5	4.5	12	8
Water Polo	4.5	4.5	8	8
Wrestling	9.9	9	n/a	n/a

※ヘッドカウンスポーツ(野球)(奨学金の数と同人数に分配することNCAAにより義務付け)
 男子フットボール(Division I FBS) / 男子バスケットボール / 女子バスケットボール / 女子バレーボール / 女子テニス / 女子体操
 ※アメフトは最大85名、男子バスケットは最大13名、女子バスケットは5名

2013-2014 MACS Career & Education All Rights Reserved

スライド11

●NCAAF(フットボール)COACHES SALARIES 2019
 (単位: 億円, \$1 = ¥107)

RANK	SCHOOL	CONFERENCE	HEAD COACH	SCHOOL PAY
1	*Clemson	ACC	Dabo Swinney	9億9029万円
2	*Alabama	SEC	Nick Saban	9億3165万円
3	*Michigan	Big Ten	Jim Harbaugh	8億2930万円
4	TexasA&M	SEC	Tommy Tuberville	8億0290万円
5	*Georgia	SEC	Bob Stoops	7億1722万円
6	*Auburn	SEC	Les Miles	7億2760万円
7	Texas	Big 12	Tommy Tuberville	7億2225万円
8	Purdue	Big Ten	Jeff Brohm	7億0820万円
9	*Oklahoma	Big 12	Lincoln Riley	6億9300万円
10	Florida	SEC	Dan Mullen	6億4940万円
11	*Penn State	Big Ten	James Franklin	6億0455万円

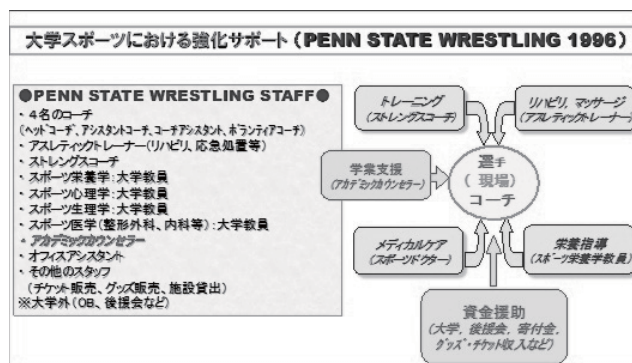
□資料: 「NCAAF フットボール年報」(USA TODAY, n.d.)
<https://sports.usatoday.com/ncaa/salaries/>

●NCAAB(バスケット)COACHES SALARIES 2019
 (単位: 億円, \$1 = ¥107)

RANK	SCHOOL	CONFERENCE	HEAD COACH	SCHOOL PAY
1	Kentucky	SEC	John Calipatti	8億9800万円
2	Duke	ACC	Mike Krzyzewski	7億7850万円
3	UCLA	Pac-12	Mike Cronin	5億8850万円
4	Tennessee	SEC	Rick Barnes	5億2950万円
5	Willanova	Big East	Jay Wright	4億7187万円
6	Texas Tech	Big 12	Chris Beard	4億4640万円
7	Louisville	ACC	Chris Mack	4億2675万円
8	West Virginia	Big 12	Bob Huggins	4億2265万円
9	Kansas	Big 12	Bill Self	4億1537万円
10	Texas A&M	SEC	Scott Morrison	4億1120万円

□資料: 「NCAAB バスケット年報」(USA TODAY, n.d.)
<https://sports.usatoday.com/ncaa/salaries/mens-basketball/>

スライド12



スライド13

富川：佐藤満所長ありがとうございました。
 質疑応答の方は最後の総合討論というところ
 でさせていただければと思います。それでは、
 佐々木監督からよろしくお願ひ致します。

齋藤先生：準備している間に。今日、参加し
 たいというゼミ生ですが、コロナの関係とかも
 ありましてオンラインで参加してもらっていま
 す。女子バスケットボール部、野球部、剣道部
 から来ています。質問があれば、チャットに
 入れてもらえば、代理で話をしますので、遠
 慮なく何か質問があれば入れてください。よろ
 しくお願いします。

佐々木監督：ご紹介預かりました、専修大学
 男子バスケットボール部の監督をしておりま
 す、佐々木優一と申します。こういった場合は本
 当に機会がないのですけれども、今日のテーマ
 である体育会の強化の実際 大学職員と指導
 者の両立というところで、実際の現場・現状と
 いうものを少しお伝えできればなと思ってお
 ります。よろしくお願ひいたします。

最初に簡単に私の自己紹介を少しさせてい
 ただきたいと思ひます。生まれは兵庫県のたつ
 の市、そうめんの揖保乃糸が有名な場所です。
 とはいえ全く記憶はなく、生まれて10ヶ月ぐら
 いですぐに静岡県の、今は静岡市清水区にな
 ってしまった清水市で育ちました。1982年8
 月18日生まれで今年40歳になります。清水と
 言ひますと、サッカーが非常に有名で、数々の
 有名なサッカー選手が排出されている土地に
 なるのですけれど、その中で私はなぜかバスケ
 ットボールにハマりました。小学校4年生、10
 歳の頃にバスケットボールを始めまして、い
 ろいろありまして専修大学に2001年に入学、
 2005年に卒業し、そのまま専修大学の職員と
 して務めることになりました。職員になったと
 同時にバスケットボール部のアシスタントコ
 ーチに就任という形になったのですけれども、
 大学生の頃から大学を卒業したら教員になっ

て指導の立場で携わりたいという思ひが漠然
 とありました。在学中は教員の免許も取りなが
 ら過ごしていたのですけれども、当時監督をし
 ていた恩師の方から「大学に残らないか?」と
 いうような形で少し声かけをいただきました。
 自分自身もお世話になったので、母校のために
 力を尽くしたいという思ひもあり、大学職員と
 いう選択をし、そのままアシスタントコーチと
 して2005年にスタートいたしました。とはい
 え当時、学生だったので、すごく甘い学生の考
 えで「バスケットを教えたい」という一心で、そ
 れが仕事ぐらいの感覚で選択をしたのですけ
 れども、人事の方からは「あくまでも職員とし
 て働くのであって、バスケットボールで生きて
 いくのではない」ということをすごく言われま
 した。それが理由なのかわからないのですけ
 れども、職員になった1年目から二部事務課と
 いう神田の夜間部に配属になりました。本当
 に忘れもしないのですけれども、5月ぐら
 いに配属先を聞いた時に、ちょっと絶望いたしま
 して。もうこの時点で平日のバスケットボール部
 に携わることとはできない、バスケットボールに
 携わろうとすると土・日だけだ、と。4年間は
 二部事務課というところで働くということも、
 当時決まっていたので、4年間はそういった立
 場で、職員と部活動、バスケットボール部の指
 導者としての活動をスタートさせました。今
 となつては、当時は学生の感覚で「バスケット
 だけやっていたらいい」というような甘い考
 えがあったのですけれども、やはり仕事としてお
 金を稼ぐ、もしくは大学生が納めていただいた
 学費の中で、我々の給料が出ているということ
 で。特に二部事務課が対応する二部の夜間部
 の学生というのは、自分自身が昼間働いて、そ
 こで稼いだお金を自分の学費として納めてい
 て、すごく学ぶ意欲が高い学生ばかりでした。
 そういった学生を二部事務課の職員として対
 応することで、本当に職員として学生のために
 働いているのだという意識が、この4年間です
 ごく芽生えたような気がします。その4年間経
 て、2009年に生田校舎の入学センターに移動

になりまして、そこからしっかりと平日も部活
 動に携わることができるようになりました。
 (スライド14)

2013年です。入学センターに移動後の4年
 後に、当時アシスタントコーチという立場から
 監督という立場に変わりまして、今に至るとい
 うような形になります。ただ、やはり両立とい
 うのはなかなか難しく、仕事優先になります。
 仕事があるとき、もしくは入学センターですと
 オープンキャンパスとか、入試があると、そち
 らを優先しなければいけないので、部活動に参
 加することができなかつたり、いろいろとあり
 ました。

監督就任の年は、当時二部のチームに再々
 延長で敗れるというような不甲斐ない結果を
 残しまして、新人戦という1年生の大会も2回
 戦負け。そしてリーグ戦も3勝しかできないと
 いうような散々たるスタートで、なかなか現状
 の厳しさを味わった年で、そこから少しずつ強
 化に向けてバスケットの知識も増えてきて、今
 に至るといような状況になっております。

2018年には全日本大学選手権、インカレで決
 勝進出、準優勝することができました。2年連
 続で決勝まではいって、あと一歩届かず準優
 勝という結果になったのですけれども。2022
 年の関東大学選手権は18年ぶりに優勝するこ
 とができました。

そんなバスケットボール部は、戦後すぐに創
 部されまして、2002年に57年目にして悲願の
 大学ナンバーワンに輝くことができました。イン
 カレで優勝することができ、日本一になりました。
 当時私は大学2年でした。翌大学3年
 生のときにはリーグ戦で初優勝し、大学4年
 の時に関東大学選手権で初優勝しました。2022
 年は、大学4年以來の関東大学選手権で優勝
 することができたことになりました。選手も今
 はすごくいい選手が入学してきてくれて、その
 後、プロの場で活躍してくれる選手が数多く
 ありまして、今年3月に卒業した5人は、全員

自己紹介

佐々木 優一

出身地：兵庫県たつの市・静岡県清水市
 生年月日：1982年8月18日（40歳）

経歴

2001年 専修大学 入学	2005年 バスケットボール部アシスタントコーチ就任
2005年 専修大学 卒業	2013年 バスケットボール部監督就任
2005年 専修大学職員 二部事務課配属	2018年 全日本大学選手権インカレ 準優勝
2009年 入学センターに異動	2019年 全日本大学選手権インカレ 準優勝
2019年 キャリア形成支援課に異動	2022年 関東大学選手権 優勝（18年ぶり）



スライド14

専修大学 男子バスケットボール部 SOARERSについて


戦後すぐに創部された伝統ある専修大学バスケットボール部は、女子部
 とともに関東大学リーグ1部に所属。2002年には創部57年目にして悲願の
 全日本大学ナンバーワンに輝き、2003年には関東大学リーグ戦で初優勝。
 2004年には関東大学選手権においても初優勝を果たしました。

近年においては、全日本大学選手権大会（インカレ）において、2018年、
 2019年と2年連続で準優勝、2021年には4位の成績を残し、大学バスケ
 ットボール界において常に上位に位置するチームです。

選手においては、U22男子日本代表選手やU19男子日本代表候補選手が複
 数在籍しており、さらには、日本男子プロバスケットボールリーグ
 「B.LEAGUE（Bリーグ）」においても、多くの活躍する選手を輩出する
 等、日本バスケットボール界を牽引している存在です。

<指導方針>
 “選手たちが力を発揮するにはどうすればいいか”を常に考えた指導によ
 り、個々の力とともにチーム力が向上し、結果に繋がっております。

さらに、世界で活躍する選手の育成や、選手としてだけでなく、これ
 から社会で活躍していくための指導も行い、バスケットボールを通じた
 人間力の向上に重きを置いて日々、指導を行っています。



スライド15

Bリーグに所属して、本当に頑張ってくれています。私自身の指導方針としては「選手たちが力を発揮するには、どうすればよいか?」というものを常に考え、個性をしっかりと見極めるようにしています。もちろん専修大学のバスケットボール部というスタイルはあるのですが、そこに押しはめるのではなく、それぞれ個人がどのような強みを持っているのか、そういったものをしっかりと見極めて、その根をまず太くしていく。そこから自分自身ができることを大学の間に増やしていく。どこか調子が悪くなってしまったり、スランプに陥ってしまった時には、自分自身が何が得意なのかというのを問いただすようにして、その得意なプレイを、得意なスタイルをしっかりと再認識させて、そこから自信を取り戻し、できることを増やしていこうというような形で、個を生かした指導をするようにしています。そのおかげでチームは本当に個性派揃いぞろいの選手たちがいるのですけれども、バスケットということになると、しっかりと同じ方向を向いて、チームとして一つになって頑張ってくれているので、少しずつ結果が出たのかなというふうに思っております。

(スライド15)

職員としては平日・土曜日も含めてなのですが、今はキャリア形成支援課という、就職支援キャリア支援の部署で仕事をしております。監督としては、9時から5時までの仕事が終わった後の課外という形で、主な活動をさせていただいています。1番の活動は練習及び試合です。平日がだいたい午後6時40分から9時ぐらいまで。土日が1時から4時ぐらいまで。レギュラーですと月曜日がオフになります。関東選手権大会が5月、6月。そして今リーグ戦の真っ最中になりますが、8月から11月ぐらいまで、毎週ほぼ土・日がリーグ戦。そして12月にインカレというような形のスケジュールになっております。私が監督になってか

ら実施をしているのが、学生との面談になります。最初に目標設定シートみたいなものを作りまして、本人自身でチームの目標と、個人の目標というのをしっかりと書かせた上で、全選手と個人面談を行い、設定した目標とか、そういったものを再確認します。年度の終わりぐらいに、そのシートをもとに振り返ってみてどうだったのか? 将来どういったキャリアを描いているのか? というところを再度相談・面談をするような場を設けています。

それとリクルート活動、勧誘活動も重要です。大学のシーズンが12月で終わりますので、その後、すぐに1月からだいたい3月までが本格的なリクルート活動の期間になり、いろいろな地方の大会に顔を出しまして、良い選手に対して声をかけていきます。その前にも7月にインターハイ、12月にウインターカップという全国大会がありますので、だいたいの見極めはこういった大会を見て、そして改めて1月から本格的に個人的に声をかけていくというような流れになっております。それにプラスして、今はキャリア形成支援課にいることもあり、すごくやりやすいのですけれども、学生の就職支援です。先ほどこの3月に卒業した選手5人がプロチームに行ったとお伝えしましたが、各プロチームの方々との交渉があります。契約内容とか、金銭的な部分とか、そういったものの交渉も間に入ってやっております。プロに行く選手ばかりではないので、企業に就職する学生に対しては、履歴書の添削とか、面接の練習とか、そういったものも対応するようにしております。保護者やOBへの対応や、スポンサー活動というものもやっております。このスポンサー活動というのは最近やり始めたものです。他のスポーツはどうかかわからないのですが、大学バスケットボール部では、ユニフォームにスポンサーのロゴをつけることが可能になっておりまして、今年から我々ユニフォームの全面に、ミツウロコという企業にご協力いただきまして付けさせてもらっています。バスケットボール部のOBがグリーンエネルギーという会

社の社長をやられているのですけれども、そういった経済面の話をしたところ、スポンサーになっていただけるということで、春先からご協力いただいています。さらにOBに協力していただきながらプラスアルファでいろいろと活動をしておりまして、9月末より今度はユニフォームのパンツの方にも、OBが務めている企業のロゴを入れさせていただき、そのスポンサー費という形で援助もいただいて、活動費に充てているというような状況になっております。

(スライド16)

大学職員と指導者をなんとか両立をして、チームとしても成績を上げることができている状況ではあるのですけれども、今実際に私自身が抱えている課題というものをお伝えさせていただければと思います。大きく3点あります。人材不足ということと、財政面、環境面ということに課題を抱えています。

まずは人材不足になります。先ほど活動内容をいくつか紹介させていただきましたが、そちらのすべてを私一人で実施しております。職員と両立をしております、職員の仕事があくまでも本業という形になっておりそちらを優先させます。外せない仕事があった場合には練習オフ、または、トレーナーとのフィットネストレーニングのみにせざるを得ないというような状況になっております。ただ最近では、チームとして強くなっているからなのか、非常にいい選手が入ってきて魅力的なチームになれると思うのですけれども、学生コーチとしてやりたいというような学生も増えてきております。今2年生にいる長野出身の学生は、わざわざ公募制推薦入試で、専修大学のバスケットボール部でバスケットを学びたい、ただそれだけの理由で専修大学を選びましたと。「すごく珍しいね」と話しています。バスケットボール界では、おそらく東海大学ですとか、筑波大学、白鷲大学、大東文化大学などはそういった人材も含めて強化していて、充実している

監督としての主な活動について

- ・練習/試合
平日 18:40~21:00、土日 13:00~16:00 月曜日オフ
関東選手権 (5月)、関東新人戦 (6月)、関東リーグ戦 (8月~11月)、全日本大学選手権 (12月)
- ・学生との面談
全選手と年2回面談を実施 内容) 目標設定、振り返り、将来について、etc.
- ・リクルート (学生募集) 活動
1月~6月に各地方の大会視察および高校訪問にて勧誘活動、7月に高校総体視察、12月に選抜大会視察
- ・学生の就職支援
プロチームとの交渉、企業就職の支援 (履歴書添削、面接練習等)
- ・保護者およびOBへの対応
部費の徴収、大会開催通知発送等
- ・スポンサー活動
企業にユニフォームへのロゴ掲載案内、サプライヤー企業への対応

スライド16

課題について

人材不足

- ・活動内容の全てを監督の私がほぼ一人で実施している
- ・職員としての仕事を優先しなくてはいけないため、外せない仕事がある場合は、練習をオフまたはトレーニングのみにせざるを得ない
- ・学生コーチが増えてきて負担軽減されているが、継続して学生が入部する保障がない

スライド17

と思います。そういったところに進学する学生が多い中で、学生コーチをやりたいという学生が増えてきて、今4年生で1人、3年生で1人、2年生で2人、1年生で1人、男子学生でスタッフがおります。それとは別で、女子学生で主務が1人、マネージャーが1人というように、すごく学生スタッフが増えてきたので、私の負担というのは軽減されてきています。それでもやはり4年間で卒業してしまいますので、継続してそのような学生が入部する保証がなく、なかなか難しいかなと思っています。

(スライド17)

続いて財政面です。活動自体、年間で700万円以上の経費がかかっているのですけれども、大学からは、先ほど佐藤先生おっしゃったように、それぞれの大会ごとにかかる費用をお伝えして援助金願いを出していますが、いただく援助というのは200万円いかないぐらいの金額になっております。合宿費用ですか、練習道具・機材の購入費用、大会の移動費用、そういったものに経費がすごくかかります。先ほどお伝えしたユニフォームに企業名を掲載するスポンサーを募りながら、そういった費用の負担を賅かっている状況になっております。また、今はユニフォームやウェアなども全て購入はしているのですけれども、少しずつバスケットボールというスポーツが大きくなり、マーケットとしても大きくなってきています。大学のバスケットボールも着目されるようになってきて、今後は我々が着るユニフォームとかウェアを、サプライでサポートしてくれるというような企業も少し出てきています。そういった活動もしながら、学生にかかる負担を減らしていきたいと思っています。またOBより寄付金を募っているのですけれども、こちらは先ほど佐藤先生がおっしゃったような、口をうるさく出すOBは少ないのでそれはすごく助かっているのですけれども、寄付金は集まりづらい状況になっております。今は留学生が2名、頑張ってくれているのですけれども、そういった

生活費かかる部分などは、寄付金とかスポンサー費用等で賅っているというような状況になっております。

(スライド18)

最後に環境面です。何度もお伝えはしているのですけれども、特に雇用環境です。職員としての雇用になっておりますので、監督としての活動というのはあくまでも業務外の課外活動というような形になっております。休日の公式試合の振替取得というのは認められないので、交通費に関しましても基本自己負担という形になっております。その辺り、先ほどの佐藤先生の資料を見ますと、規模が違いすぎて、ものすごく小さいことを話しているのですが、積み重ねれば山となるのではないのですけれども、自己負担の部分が改善されるとありがたいとは感じています。あとは施設について、エアコンもありながら体育館使わせていただいているのですけれども、待機場所がなかなかありません。部活動の前後ですか。私自身もバスケットボールの指導者としてのスキルを上げていきたいと常々思っております。コーチングのスキルもそうですし、バスケットボールの知識も増やしていきたいという中で、勉強する場所となると職場ではできないので、家に帰ってやるだけになってしまうので。何かそういった部屋みたいなものが共同でもあれば、書籍を購入して勉強したり、オンラインでいろいろ受講したりとか、さらに指導者としてのスキルをアップデートできるのかなと感じております。また設備・機材についてです。試合を録画して相手チームの分析ですか、自分たちのチームの練習の映像を取って振り返りなどはiPadを使って録画し、先ほどお伝えした学生コーチが色々と作業しています。そういった際に使用する機材については、全て私物を使用するというような形になっております。人材不足、財政面とも絡むこととなりますが、最新のものとか、有効に活用できるものを大学としてではなく、チームとして購入できればとは

考えています。チームとして動ければ、財政面を賅うことができるかもしれませんが、人手不足もあり、なかなかちょっと難しいところがあるのかなと。やりたいことは色々あるのですけれども、少し限界があったりしているというのが現状となっております。

(スライド19)

とはいえ、本当に専修大学で日本一になることを目指して入部してきてくれる学生が今すごく増えてきて、大変ありがたいことに結果も少しずつ出てきて、非常に今充実した形でバスケットボール部の監督として携わることができています。今後、年齢を重ねていったりとか、職場の環境が変わっていったりとか、同じようにできるかどうか、この先どうなるのか、本当に同じように学生が入ってきてくれるのか、そういった部分の不安はあるのですけれども、これまでやってきた、積み上げてきたものが結果として出ているので、モチベーションを高く保ちながらできています。これを少しでも継続できるように、できることを考えながら、全力で強化につなげていきたいなと思っています。

以上になります。ありがとうございました。

富川: ありがとうございます。将来に向けてと語られている姿に感銘をうけました。続いて馬術部の西山慶太監督。よろしくお願いいたします。

西山監督: ただいまご紹介に預かりました、馬術部監督の西山と申します。馬術部はこの生田キャンパスや、神田キャンパスにあるわけではなくて、伊勢原グラウンドという遠く離れた伊勢原市にあるので、「どこに居て、何をやっているのだ?」と、おそらく皆さんあまりご存じないかと思います。今回は同じ伊勢原で活動している野球部の学生も参加されているとお伺いしましたが、それでも横目で見ても何かやっ

課題について

財政面

- ・年間で700万円以上の経費がかかるが、大学からの援助は、200万円未満となっている
合宿費用、練習道具・機材などの購入費用、大会移動費用
→ユニフォームに企業名を掲載するスポンサーを募っている
- ・OBに寄付金を募っているが、組織化されていないため少額
→50万弱
- ・留学生の生活費も寄付金とスポンサー費用で賅っている

スライド18

課題について

環境面

- ・雇用環境
職員としての雇用のため、監督としての活動は課外、休日の公式試合の振替取得は不可、交通費も基本自己負担
- ・施設環境
教官室などが体育館にはないため、部活動前後等の居場所がない
- ・設備環境
部で使用する機材(タブレットなど)は全て私物を使用

スライド19

ているぐらいの認識だと思えます。実際、どのようなことをやっているのか、そこまで詳しくはお話できませんが、現状を報告しながら、私なりに大学でスポーツをやることの意義についていろいろと考えてみましたので、そのあたりを中心にお話をできればと思います。

まず専修大学の馬術部は、今年度で創部100周年という節目でございます。基本的に馬術部というのは伝統ある歴史の長い大学にしかないというような特徴がありまして、明治時期は馬というのは近代兵器の一つであって、戦前は富国強兵の名のもとに、馬を育成すること、生産・育種改良すること、そして騎乗技術のメソッドを確立することは、戦場の勝敗をまさに決するような部分であったというような歴史があります。その流れで、いろいろな大学で馬術部ができたというような経歴もございます。現在の部員数が16名、うち女子部員が5名おります。また、馬術競技には男女の区別がありません。これはオリンピック等のトップレベルの競技でも同様です。ちなみに馬の性別も競技では同様に区別されません。今、馬は15頭。難しい漢字ですけど「繋養」馬を養い育てていくという意味ですが、15頭繋養しています。伊勢原グラウンドの一角に専用の寮一体型の厩舎と馬場があります。

私は生田の教務課に在籍しております。卒部は2006年で、専修大学に入職したのが2009年。入職してしばらくコーチをやっていたのですが、一度現場を離れて、その間に働きながら筑波大学大学院のスポーツの研究科・専攻に行き2015年に修了しました。ここではウマの動作、ウマが障害を飛ぶ動作のバイオメカニクス的手法を用いた研究で修士論文を書きました。その後、帝京科学大学の大学院、理工科研究科に進み、こちらでは人とウマとの情報のやり取り、インタラクションみたいなことを研究して、単位取得満期退学しています。監督の他にコーチはここに書いてある5名の方、大学の先生である小西先生と澤先生のお2人と、他3名はOBで富沢コーチ、富樫コーチ、堀田コーチをお願いをしているわけです。小西先生には主に学習サポート、あるいは個人的な学生からの相談とかを担っていただき、すごく助かっています。私に言いにくいことでも彼女のところには言ってくれるということがあります。澤先生には動物心理学学者の目線で、科学的に馬のトレーニングを見るといった講義などを定期的におこなってもらっております。富沢さんや富樫さん、堀田さんについては、私のメンターと言いますが、長い経験からいろいろとアドバイスをもらっているという状況で

ございます。

私が監督になりましたのがこの4月であります。昨年の12月ごろから色々あって、体育事務部、体育事務部長より打診があり、お引き受けしたということになります。1月から3月も監督代行ということでやっておりました。私も子供が小さく、仕事も忙しく、さらには仕事関係で学会の委員長もやっているような状況で時間が全くありません。昔のように現場中心で見に行くことができないということで、いろいろ考えました。まずどんな問題があるのかということ、一般的な状況について大学のスポーツに関する文献をサーベイしてみて、全体像を考えるとということから始めました。個別的な現場対応については、実際にやってみて逐次的に解決していく他ないということを進め始めたところでございます。

佐藤先生の冒頭のご挨拶の中にもありましたが、この「大学スポーツ振興に向けた大学スポーツ統括業務の手引書」というものがUNIVASのガイドラインとしてあります。主にここに掲げている4つ領域、つまり「部活動のガバナンス」、「学業の充実」、「安全・安心な大学スポーツ環境の整備」、「大学スポーツの推進とマーケティング」など、これらの課題に対してどのように対処していくべきかという内容の一般論が書かれているわけです。まずはこれを見ながら馬術部の現状を踏まえて、一つ一つ潰して行こうと、タスク設定をしました。簡単にまとめるとこのような感じです。

1番目は「部活同のガバナンスの問題」についてです。コンプライアンスの問題のところですけども、馬術部では馬の売買、馬を買ったり売ったりするわけです。購入する主体だとか、所有権というのはどこにあるでしょうか。契約書はどこにあるか?といった問題について、あまり考えられておりませんでした。お金は払うけれど、領収書も存在しなければ、所有権の存在もはっきりとしない、そんな状況でした。これはまずいと思いました。それから、馬を運んだり、飼料を運んだり、あるいは試合会場が田舎にしかないの、そこまで移動したりと、必要性があるので部車として3台の車両を保有していますが、これらの所有者や保険の名義なども一貫性がなく、良くない状況でした。馬術は結構お金がかかるスポーツですので、昔から学生はアルバイトをしていました。これもよくよく考えてみれば、大学馬術部の学生にアルバイトさせて、それを運営費として召し上げるというような状況です。これもよく考えれば非常にまずいことです。

それから年間の予算規模、馬術部ですと大

体2000万円を超えるのです。にもかかわらず領収書もバラバラ、毎年変わる主務の学生がExcelに手打ちしているという状況で、これでは管理できるわけがありません。数十万円単位の誤差が当然出るわけです。体育事務課から決算書等の提出が今年から求められるようになりましたけども、ちょうど会計処理方法の改善に1月から取り組んで、これへの対応というのは、非常にうまくいったかなというところがあります。ちなみに会計にはフリーのクラウド型の会計ソフトを使って、単式簿記の物ですけども、これは今のところ上手くいっています。

2番目は「学業の充実」です。馬術部学生の学修状況があまり良くないということ、ここにいる先生方はよくご存知だとも思います。地理的に大学から遠い、馬の世話は朝早くて肉体的労働、疲れが溜まる、学習の意欲低下という悪循環が怒っている印象です。単位の取得状況が悪いので、まずはその現状を踏まえて、しっかり面談等しながら履修相談をすること、それから授業に出席できる環境の整備ということで何時から部活を始めて何時に終わって、どれくらい移動時間がかかって、授業時間がいつで、帰ってきてからどのような仕事をやって、その仕事をどうやって割り振っているのか、というようなことを整備するコンサルみたいなことをしなくてはいけない状況です。実際やってみると、割と授業に出席できないことはないということも分かりました。一方で、時間ができたところで、休憩室で寝てしまうとか、そういったことももちろん発生します。授業に出席するかどうかが、動機づけはしなければなりません。最後のところは学生に委ねる他ない状況です。せめて履修するところと、出席できる状況・環境を作ることまではこちらの仕事だろうということで整備しています。

今少し触れた学修への動機づけの部分ですが、馬術部の学生が単位を取るためだけに、辛くても学校へ行くといったような、すごくネガティブな意識を持っています。つまり、何かを学びに積極的に学びに行こうという内発的な動機というのは、現状ではあまりないわけです。私もいろいろと研究をしていましたので、馬術というのは動物相手であり、歴史もあるし、文献もある。英語も読まなくてはいけないとか、大学で学ぶべきことはたくさんあることを知っています。ウマというものを中心にしながら、いろんな興味関心を引くような話題を作り、働きかけ、講義などもしたりしてうまく部活動から学修への接続ができればいいと思います。

それからキャリア支援も重要です。近年入

ってくる学生は、競馬関係の職業につきたいとか、乗馬クラブで就職したいとか、馬関係の職業につきたいという希望を持って入学してくる学生が非常に多いです。しかしながら、馬業界はそれなりにきつい業界です。例えば調教師になるとか、JRAのキャリア職になるとかという目標であれば良いですが、そういったホワイトカラー以外の状況は非常に厳しいということも現実にはあります。そういう現実を知ること、あるいは大学4年間でもっと欲張って他の産業・分野も知って、最終的に卒業する時にどちらか選べるような状況にしましょうと方針で指導をするようにしています。

3つ目は「安全・安心な大学スポーツ環境の整備」です。馬術はスキーと並びserious injury riskが最も高いスポーツの一つとされることがあります。落馬や500kgくらいある馬が転倒して人の上に落ちてくるというようなかなり危険な状況があります。そういったリスクが常にあるスポーツだということを、改めて考える必要がありました。しかしながら、現実的に毎朝5時の練習時間に私が毎日行くというのは現実的に不可能です。監督・コーチがいなくて活動することが多いです。伊勢原にも体育事務課があって、そこに職員の方々がいらっしゃるのですけれども、そういった大学部署とも連携して、トラブルが起こった場合にどう対処するかということが今まで明確には決まっていなかったのです。それに対してはすぐに体育事務課の方で、何かあったら伊勢原事務室に行って対応を仰ぐような仕組みや連絡網を作ってくれました。馬術競技における安全安心マニュアルというのでも作らなくてはいけなくて考えているのですが、これは他大学にも一緒に作ろうと呼びかけかけているところです。UNIVASには安全安心認証「UNIVAS SSC ([UNIVAS SAFETY AND SECURITY CERTIFICATION])」制度というものがあり、学生連盟でこの制度の評価項目に沿った形の対応策をつくり認証をもうことができます。serious injury riskが高いスポーツほど必要性が高いので、馬術競技では積極的に取り組むべきだろうと考えています。

あとは保険加入の促進もありましたけれども、これも伝統的に高い保険に入っていました。大学で学生教育研究災害傷害保険、いわゆる学研災というものに全員強制的に加入していることは知っていましたが、この保証範囲がどこまでなのか、いくらぐらいなのかというのは知らなかったです。これを見みると、馬術競技は除外対象とはならず、全員が部活動中の補償対象になっていました。補償内容は基本的にこれで最低限の範囲ではよいの

ではないかという結論にいたりしました。

最後に「大学スポーツの推進とマーケティング」のところでは、まずはトレーニングの状況把握、これは競技力強化の部分ですが、普段の練習にあまり行けないのでどうしようかと考えました。馬術には獣医師(馬のお医者さん)や装蹄師(蹄に蹄鉄を打つ靴屋さん)といった専門職の方々と連携する必要があります。これらの方々とうまく連携してトレーニングや競技スケジュールを情報共有してマネジメントしていかないと、なかなか競技レベルも上がっていきません。それからアウトリーチ活動。主に高校生向けにはできていますが、それしかできていません。伊勢原で何をやっているのが多くの人に知らないように、学内に向けても情報発信をしていかなければならないと思いました。

それから活動資金の確保に向けた寄付金の募集です。今はすべて大学の寄付制度を利用して、そちらに寄付金として入金してもらうということにしています。こういった経済的な活動をしようとしたときに、体育会の部というのは任意団体でしかなく、直接寄付を受け入れたり収益活動をしたりすると、例えば納税の問題など、コンプライアンスと大学のガバナンス上の問題を問われるリスクが非常に多いという印象です。アメフトなどを中心に一般社団化する事例もいろいろありますが、この辺を本学としてどうしていくべきか、というのは悩ましいところではあります。それから共同研究についてですが、馬に関する共同研究では助成金や補助金の獲得や、競技力強化のための馬場整備の話などもちらほらあります。

今回は「強化の実際」というタイトルなので、ここからは馬術部の競技力強化に話しを移します。大学馬術で行われる競技は、障害馬術競技と馬場馬術競技、総合馬術競技の3種類あります。オリンピックの馬術の種目もこれと同じです。それぞれ最低3頭の団体戦で一つ一つの競技種目が実施されて、その3頭の結果で団体の成績が出され、各人馬それぞれの結果が個人戦という形で成績となります。つまり、一回の競技で個人戦・団体戦の双方が行われる仕組みになっています。したがって、3種目×3頭ずつの合計9頭はいないと、それぞれの種目の団体成績が取れないこととなります。それから当然、予備馬が必要です。全部で9頭しか所有馬がいないと、選抜もできません。それから、育成中の馬というのでも必ずいます。繋養している馬匹は、引退競争馬が多いですが、さらには初心者用の練習用の馬なども必要です。馬術競技用の馬というのは、例えばフォーミュラカーやラリーカーのようなもので、いきなり

初心者が騎乗すると事故を起こすリスクが高まります。馬術部には大学から馬術をはじめの初心者用の練習馬なども必要ということで、現状計15頭を繋養しています。当然ですが購買と飼育には多額の費用がかかる状況です。

それでは馬術競技とはどんな競技なのかということを中心に説明します。まずは障害馬術ですが、障害を落とさず止まらず、決められたコースに従って飛んでいくという、大学レベルでは障害の高さが最高130cmの競技になります。オリンピックなどのハイレベルになると最高165cmになります。障害の形状にもバーが2つあって幅があるようなオクサー障害と呼ばれるものと、一本だけで高さのある垂直障害とよばれるもの、それらを組合せてコースが設定されます。

馬場馬術はDressageと呼ばれるものです。馬の動きそのものを採点によって競う競技種目です。今、スライドに実際の映像を流していますが、駈歩、停止・敬礼、速歩発進、左肩内という前足だけクロスさせる動作、S字の反巻乗りという円運動、右肩内、など、ここまでご覧いただいたような複雑な動きを実施させるために様々なトレーニングを普段から積んでいます。緑の箱に審査員がおり、彼らがその動きを個々の項目ごとに採点をして、その点数で競います。

もう一つの総合馬術というのは、ここまで説明をした馬場馬術と障害馬術にクロスカントリーを加えた3種目を同一人馬で実施して、その総合成績で競う競技です。クロスカントリーコースは自然の草地のようなところで行います。その中に障害物があつたり水の中に飛び込んだりだと、分速500mぐらいの結構な速さで走ります。全長3キロぐらいのコースで、馬のフィットネスとかコンディショニングというのは非常に大事になります。

ここまでお話ししたように競技力強化に関してやるのが多岐に渡ってたくさんありましたが、当面すぐできそうな事項から取り掛かりました。まず、ウマのコンディショニング、競技データやトレーニングデータの管理などです。馬のコンディショニングに関しては、獣医師の定期的な診察をおこなうようにしました。これは怪我をしてからの治療ではなく、未然に防ぐという予防的な意味合いのものです。それから、与える飼料の栄養価なども調べて、最適な状況を目指しています。装蹄についても高度な専門的な知識が必要ですから、これらコンディショニングに関する最新情報を文献研究して、どうすべきか考えながらやっていっています。競技データについては複雑すぎてまだ手

をつけられていないのが実情ですが、トレーニングに関しては日々どんな運動をしているかということ、Googleのツールを用いて記録するようにしました。専門的なウマに関する知識に加えて、ICTの知識をプラスした方法を学生に対して実践するのは、こちらも高度な知識と技術と多くのエフォートが必要ということが、やってみてよくわかりました。トレーニングデータは、まずgoogle formsを使って記録するようにしました。1つformを作るとスライドにあるようにiPhoneなどの画面でアプリのように表示をすることができます。学生はスマートフォンなどの画面からこのアプリ(google formsのリンク)から入力するだけなので、これであれば毎日の記録もさほど手間がかかりません。ここに入力したものは自動的にgoogle spreadsheetにデータが蓄積されます。さらに必要に応じてGoogle Colaboratoryというスクリプトが書けるプラットフォームがありますが、必要に応じてそれを使います。最終的にはGoogleのLooker Studioというところにデータを連携して可視化します。学生がそれを見て、日々のトレーニングに活かせる有益な情報とすることを目指しています。これは8月から始めたので、どうやって有効活用して行くかということ、これをこれからやっていかなければいけません。Googleドライブにこれらの情報は保存できるので皆で共有でき、しかもGoogleのプラットフォームの中で全部統一できるといったところが強みかなと思います。

これが実際のformsの画面ですけども、運動の記録の対象日とか、誰がどの馬に乗ったかなど、また乗った時のフィーリングや運動の強度(軽い運動だったのか、強めに運動したのかな)、を10段階のスケールで聞いて、運動時間、運動の内容、それから記述コメントがあればそれを入力してもらっています。スマートフォン等からほんの数秒で入力が終わる感じです。これで自動的にデータが集まるわけです。例えば、Looker Studioの画面で特定のウマを1頭選ぶと、運動強度がどうだったかとか、運動時間が何分だったかとかという情報がグラフで出てきます。このフィーリングの情報は、馬の調子を表す指標として使えるなと感じています。コメントを記入したところには横のテーブルでコメントを確認できるというような仕組みを一つ作っています。飼料管理についても、ウマごとに作成していますが、Looker Studioだけではローデータから上手く可視化できないということで、ここでGoogle Colaboratoryの出番となります。これは学生ではできないのでプログラムを書いてあげています。まだ作成途中なのですが、各栄養素の充

足量が100%に満ちているかどうか、カリウムとリンの比率だとか健康に悪影響を及ぼすような重要な要素がないか、などといったような情報も可視化できます。ヨーロッパの餌屋さんには有料で配信している同様のツールもありますが、これと同じようなことがほぼ無料で、Googleの中だけで再現できるところまでできたという感じです。

次に、騎乗技術の指導についてですが、これが一番難しい問題でした。伊勢原馬場での直接の指導は月に2回ぐらいが限界な状況です。競技会シーズンになると競技会場での指導が増えるため、さらに伊勢原馬場での練習をする機会は減少するような状況です。そのため、Googleドライブに動画をアップする専用のフォルダーを作って、学生に動画をアップロードしてもらっています。しかしながら、これもなかなかアップロードする数というのが増えませんでした。撮影の手間があり、スマートフォン等があるとはいえ、誰かが撮ってくれないといけませんので手間がかかります。加えて、練習でうまくいったものしかアップロードしないのではと、いろいろと問題もあります。騎乗技術がある程度のレベルに達している、言語レベルでディスカッションのできる選手は大丈夫ですが、ドリル的な騎乗訓練など基礎的なトレーニングするときには、やはり直接、つまり即時フィードバックや準則時フィードバックができる状況が必要だと痛感しているところ。それができないので基礎的な技術のレベルの底上げということが現状の課題だと認識しています。

専修大学ではGoogle Workspace for Education plusという何でもできるライセンスが入っています。今日紹介したように馬術部でもこのGoogleライセンスでいろいろやっているのですが、事務職員のアカウントは制限が多く、私個人のGoogleアカウントと部員学生のアカウント間で利用しています。ただ、学生のアカウントは卒業してアカウントがなくなると、そのアカウントで保存した動画など、すべて消えるという大変な問題を孕んでいます。この後の話に繋がりますが、大学のスポーツ、部活というものはあくまで課外活動でその活動で使うものは個別の部ごとに用意するものなのか、教育活動の一環として大学が用意したものを使うべきなのか、というのは議論が必要かなということで、最後の問題提起の部分へ話を移したいと思います。

「強化部の部活動は正課外教育か」というこ

とで問題提起をさせて頂きたいと思いますが、高等教育機関における部活動の位置づけについて調べてみると、非常に曖昧であるという状況でした。直感的には、歴史的、伝統的にも学生の自治組織だったのではないかというような認識が私自身はありました。さらに調べてみると、「課外活動」や「正課外活動」という言葉ではなく、「正課外教育」という言葉が既に2000年頃から使われていました。2000年の文部省高等教育局から出されたいわゆる「廣中レポート」、それから2007年の日本私立大学連盟のレポートでも、正課に加えて正課外でのあらゆる経験が、大学生の成長を促進させる、そういった文脈で正課外での教育は非常に重要であると述べられています。つまり正課外であっても、「活動」ではなく、「教育」であるという意味付けを文科省としてははっきり示しているということです。であるならば、その正課外教育である部活動は、高等教育機関・大学における教育権や学生の学習権に関する枠組みとしての議論が多分に必要ではないかという問題提起になります。もっと言えば、部の監督・コーチに教育裁量権は認められるかどうかといったことをしっかり議論しなければいけないと思います。このように考えてみるとコマーシャリズムや部の競技力強化などについて、大学スポーツを根本からもっと議論しなければいけないと考えます。筑波大学大学院時代の恩師、菊幸一先生の論考を参考にしましたが、現在の大学スポーツが持つ課題として取り上げられていることと同様に、スポーツの二極化、つまりスポーツの高度化と大衆化の問題であると思います。高度化がコマーシャリズムと結合し、大衆化はファッションに結合する、スポーツそのものの自立性が衰弱しているのではないかというのが、現代スポーツのひとつの課題としてあるわけです。現代以前の近代スポーツの場合は、アマチュアリズムに立脚していましたが、アマチュアリズムは何処に行ってしまったのかということも改めて考える必要があるわけです。菊先生は、最終的にスポーツの空間というのは、社会の位相空間だと主張されています。これは難しい話かもしれませんが、先ほど佐藤先生がアメリカの事例に触れましたが、日本において近代あるいは現代のスポーツとコマーシャリズムの関係を考える上では、箱根駅伝と新聞社が良い例ですが、マスコミとカレッジスポーツの結びつきがあったわけです。おそらくその時代の社会の構図とほぼ同じ構造です。電通とスポーツのニュースなどはホットな話題ですが、そのバックグラウンドをどのぐらいの人が理解しているか。大学でスポーツを考える上

では、次のスポーツに関するモデルは何があるのかということを考えて、実践し再構築していくということがおそらく必要だろうと思います。UNIVASの資料等を見ていると、社会一般のスポーツクラブの文脈で書かれている内容が多く、残念ながら高等教育機関でスポーツをする、つまり先ほど申し上げた「教育」という視点からの言及が見当たらないことが分かります。

正課教育の中にスポーツに関する授業があって、一方で正課外教育という各運動部がある。専修大学のこのスポーツ研究所は、まさに研究教育機関として、この両輪の中心にあるエンジンとして存在するわけです。当然、スポーツ研究所と保健体育部会をイコールとして考えた時に、正課教育の科目を提供して運営する一方で、正課外教育とも組織的な連携がなされているかと考えた場合に、少し疑問に思うところがあります。個別的には連携されている部もありますが、大学全体の組織構造として、連携があまりされていないのではないかと思います。少なくとも馬術部とはあまりお付き合いがないというのが実情だと思います。大学の組織全体の中で組織的な連携の仕組みを、実際にどう落とし込むか考えていくことが重要なことだと思います。

これで最後になりますが、馬術部のマネジメントは非常に多岐に渡り、マンパワーも必要で、できる人材に限られることを改めて思いました。一方で、大学職員でありながら監督をやるときには、大学のスポーツ組織の構造とか、今後の在り方とか、外部の方よりは考えやすいと思えました。つまり、大学の教職員がスポーツの強化部の監督をやるということは良いことだと思えました。一方で部活動、正課教育、研究活動という重要な三つのキーワードは有機的に繋がってない部分があるだろうという問題意識を本日は共有させていただきました。少なくとも馬術部では、このスポーツ研究所の専門的な知見を欲しています。さらには馬術部内の個別の課題について、これは私が全部やってしまうのではなくて、学生自身が自覚して課題解決に取り組んでいくというような、大学としての仕組みというものをどうしたら作れるかということも考えていきたいと思っています。例えば、ジャーナリズム学科にはスポーツインテリジェンス領域もあり、スポーツ推薦入学者が多く馬術部の学生も多数在学しています。プロジェクトや卒業論文で、部活動の現場にある課題から問題設定して学修する形、つまり正課教育の中で正課外の課題解決を設定することで、正課外教育と接続させるようなことです。この連携はすぐに考

えることができると考えています。最後にもう一度繰り返しますが、高等教育機関における重要な教育活動の一つとしてのスポーツの役割、専修大学で大学スポーツのあり方そのものについて、改めてゼロベースで議論できればと考えています。

富川:西山監督ありがとうございました。改めて、お二人方ありがとうございました。まず、何かテーマを決めるよりは、自由な質問、意見から進めていけたらと思いますが、如何がでしょうか？

齋藤先生:本当にありがとうございました。お二人のプレゼンは非常に勉強になりましたし、よく考えて運営されているなど思いました。非常に制限がある中で、成果をあげられながら、活動を継続されていると思いますが、他の大学と比較するとどうなのかと思うのですが。本学の環境というのは、どうなのかというところの情報があれば、教えてもらいたいです。例えばバスケットでは、白鷗大学とか日日本大学とかと比べて、スタッフの人数とか、資金とか、環境面に関してはどうかとか、そういう情報はありますか？

佐々木監督:今、われわれが所属する関東の一部リーグは、14チームに増えているのですけれども、上位校になっている大学の指導者を見ると、教員の方が多いです。職員として指導に当たっているのは、専修大学と大東文化大学、中央大学くらいだと思います。大東文化大は今やっている監督、私と同年代・同級生なのですけれども、教員と長年かけてスポーツセンターみたいなのを立ち上げて、そこの一員としてほぼ専属の職員だけれども、バスケットボール部の指導がその仕事という形で指導にあたっています。本学で言うと野球部や駅伝、ラグビーですかね。そういった立場で指導にあたっているの、その監督は海外の代表活動など、そういったものにもかなり行っています。中央大学は、監督は職員としてしているのですけれども、ほとんど練習には参加してないそうです。ただここ近年力をつけてきているのは学生が主体的に動いて、自分たちで練習メニューを組んだり、自分たちで課題見つけて取り組んだりしているようです。そこは本当にすごいと思います。それ以外の競合している筑波大学、東海大学、白鷗大学は教員が監督をやられています。一方で、一部の大学で昔までは力があつたのに最近衰退している、あるいは2部に降格しているところは、決まって外部の指導者であつた

り、社会人で平日見られなくて週末だけ来る指導者であったり。あとはもう全てが学生コーチや学生主体でやっているなど。そうなるとやはり限界が見えてきて力の維持は難しくなっていると思います。

西山監督:馬術は本当にいろいろな形があります。今一番強いところだと日本大学ですが、ここは職員の方々が3、4人、さらにはOBなどいろんな方を巻き込んで運営をしています。そしてOB会の組織そのものを強化し、資金を集め、学生の生活管理も徹底しています。当部と比べてどうかと言われると、部員数が多いです。つまりは規模と人数が多いです。一方で、多くの大学馬術部では、大学の教職員が監督・コーチを担っているのはあまりないかもしれません。基本的にはOB・OGの方が役割を担っているというのが一般的かなと思います。

齋藤先生:ありがとうございます。なるほど、そうすると、うちの環境でここまで実績をコンスタントにあげられているのは凄いですね。環境はいまいちだけれど、そういうチーム作りをしていると。佐々木監督はいかがですか。

齋藤先生:ありがとうございます。なるほど、そうすると、うちの環境でここまで実績をコンスタントにあげられているのは凄いですね。環境はいまいちだけれど、そういうチーム作りをしていると。佐々木監督はいかがですか。

佐々木監督:周りが良い環境で、私は分からないのですけれども、そういう中でも絶対に負けないようにしようと、モチベーションには繋がっています。

相澤先生:こうやって現場の指導者の方の話しを聞いて凄く勉強になりました。ありがとうございます。佐藤先生の話では、一番お金を費やしている予算がNCAAではコーチだと。今日お話を聞くとお二人方はボランティアで、パッションで乗り切っていると、ここにアメリカと日本の大きな違いがあるのかなというのを感じました。前向きに聞きたいのですけれども、そんな環境の中でも、選手が専大に来て、指導者の方に指導されて、結果を残してと。専修大学の強みとは一番何なのですか？

佐々木監督:私は強くしようということにあつた

つては、ノースキャロライナにあるデューク大学を参考にしています。バスケットボールではすごく名門で、そのヘッドコーチ、コーチKという愛称のマイク・シャシェフスキー氏という、オリンピックのアメリカ代表のコーチもやられていた本当に素晴らしいヘッドコーチ曰く、大学のヘッドコーチの仕事の9割以上はリクルートだ。優秀な選手を連れてくる事がまず仕事であると。それはあながち間違いではないかと、私もやりながら凄く思っていました。というのも私が監督になってから、初めてリクルートして専修大学に入って来てくれた選手たちが、4年になった年にインカレで決勝まで行くことができました。そこから先、やっぱり良い選手を連れてこようと、良い選手に声をかけるには良いチームでなくてはいけないと思っております。私が現役の時にも成績は残していたのですけれども、本当にハチャメチャなチームで強ければ良いだろうというようなことが、かなりあったと思います。実際に高校の先生などにお話ししたりすると、以前は行かせたくないチームの一つに専修大学はなっていたのです。それではダメだと思いましたので、私が一番身近にいる大人として、もちろんバスケットボールは一生懸命やっていこうと、一番純粋になれるものを裏切らないようにやっていくけれども、一人の人間として専修大学バスケットボール部という看板を今背負っていることを意識しよう。いろいろな人が応援してくれたり、手を差し伸べてくれたり、声をかけてくれたりするけれども、いつかその看板を下ろす時、いつかバスケットボール選手という看板を下ろして一人の人間となった時、同じように声をかけてくれる人がこれだけいるかとか、そういうことを考えた時、やっぱり人間力というものを高めなくてはならないと思いました。選手たちには伝わっているかどうかは別として、そういうことを、毎日伝えるようにしていきました。その中で、個性をある程度大事にして、彼らの純粋にバスケットボールが好きとか、こういうプレイが得意とかを前面に出すようにしています。先ほどの長野からわざわざうちを選んでくれた学生に「なぜうちを選んだの?」と聞いたら、「いろいろな大学のチームを見たけれど、専修大学が一番楽しそうにやっています。だから専修大学でやりたいと思いました」と言ってくれました。それと同時に高校の先生からも「専修大学変わったね」というような声をいただくようになって、そこから「専修大学に選手を送るよ」であったり、専修大学に行きたいという選手が増えてきたり。それに伴い結果が…、もちろん良い選手を取ったからといって勝てるかといえば、そうではなく、そこで勝て

なかつたら私の責任になるので、私も選手たちを上手く起用する。その選手にあったバスケットを展開するということは、勉強していかなくてはいけないのですけれども、そこが本当にやっていて楽しい。良い意味での自由というものが、高校生や周りによく映っていて、それが強みになっているのかなというのは感じます。

佐藤先生: 今話を聞いて、自分の過去を振り返りながら、佐々木監督の人間性、こういう人からスカウトされたら「行ってみようかな」とそんな気になりそうだなという感じがしました。でもそれは専修大学の魅力ではなくて、佐々木監督が作り上げて来た、数年間の中で、そのカラーが物凄い学生たちの、高校生の心を動かしてきたのではないかなと思いました。ただやっぱり人間にも限界があるので、さっきの例えば職員として働いてお金貰いますけど、バスケットボールの監督として学校からほとんどお金が出てないわけですから。補助金ぐらいですよね? やっぱりその辺を考えていかないと、家庭もありますからね。

佐々木監督: そうですね、一律公平性というのは、うちの大学の特色であるかもしれないのですけれども、成果をちゃんと見ていただきたいとか。白鷗大学は去年はインカレで優勝したり、春の大会で優勝したり。そのご褒美に何が欲しいか理事長から直接言われて、「海外に合宿に行かしてください」、「じゃあわかったそれ出そう」とか、体育館のフロアを全部張り替えたとか。そういう形で成果を出した分の何かこう、私がでなくても、選手達にとって良い環境、プラスに働くことがあると、またモチベーションにも繋がるのかなと思います。指導者もよりその立場としても頑張ろうというパッションに繋がるかなと感じます。

西山監督: デューク大学の例でリクルートが9割というお話がありました。馬術部の場合はちょっと特殊なので、ウマの購買というところも加わってきますね。強みは何かという点については、先ほども述べたように馬術部を見ている職員がいるのも強みかなと思います。他大学の馬術部ではあまり職員のスタッフがいなくて、一般の会社員よりは指導はやりやすいと思います。冒頭にアメリカの監督・コーチの高額な人件費のお話がありましたが、これも社会の構造的な問題かなと思います。社会構造がダイレクトにこの大学スポーツにも反映されていて、つまり人材の流動性の問題だと思います。より良い人をリクルートしてくると

ような状況がアメリカにはあって、そこには資金が流れていく。そしてコマーシャルでも繋がって、好循環が加速して潤沢な資金がまわる状態になっていくという構造なのでしょうが、おそらく日本で同じような状況はできないと思います。羨ましいとは思いますが、できないことを考えるのではなくて、我々にはどういうモデルがあり得るのか、我々の目的は何なのか、ということをしっかり考えるべきだと思います。これは一番見失いがちですけども、お金をもらって学生を教えることが目的では決まっていけないと思いますので、議論をして行くことが大事かなと思います。

佐藤所長: 今日、佐々木さんの方から、課題ということで人材、財政、環境などを上げていただいて、馬術部、西山さんからも同様の内容が話されました。先ほど優勝したことへの対価を求めたときに、そういうものがあればよいと。アメリカのNCAAとは違って、時間を相当削られているわけで、そこが対価としてあればいいのではないかと。求めているとしたならば、それは指導環境ということではないのか。スポーツ研究所のスタイルで言うと、富川先生がパラリンピックを目指していて、我々は柔軟性をもって自分たちで調整が効くというのがあるわけで、その中で時間があります。職員の方があまりにも縛られ過ぎているのかなということがあるので、その辺は大学としてお願いできれば一番いいのかと。監督を委嘱することに対して、指導環境がもっと充実すれば、学生に対してもっとサポートができるのではないかと思います。それがないがために、恐らくいろいろな不満が溜まる場所もあるでしょうし、その辺をうちの大学としてどうあるべきか議論の余地があると、私の中で今、凄く感じております。

佐々木監督: やはり通常のただのサラリーマンになるので、時間的な制約があります。仕事をしている時間帯に、何か学生にトラブルがあった場合は抜けさせていただくなど、そういう部分は融通をきかせて頂いているのですけれども、バスケットにあてる時間になると何もありません。私の子供がまだ小さいので早めに寝て、朝4時、5時に起きてから、相手や自分たちのフィルムを見たり、24時間は限られているので、何を削るかというところになると、睡眠時間を削ったり、昼休みの時間に食事しながら見たりとかやっているのですけれども、そういう制約があるのは仕方がないのですけれども、フレックスな働き方みたいなものが

今では当たり前になってきているので、そういった部分を取り入れていただくことができれば、もう少し柔軟にできるのかなというのはあるのかと。あとはせっかく体育事務課という部署がありますので、大学職員としての知識やスキルをつける必要性が絶対あると思いますので、いきなり入職してすぐにその部署とはいかないまでも、何年間かは必ず違う部署で働いて、何年か以降、体育会を指導している。体育事務課所属で、自分達の部だけでなく、体育会全体をサポートできるような配置などがあるといいですね。自分達の部だけを見るためにそういった形でやるという職員はいないと思うので、横のつながりもできるでしょうし、何かできる事があるのではないかなというのは感じています。

西山監督：やはり職員としての職務に指導ということが入らない限りは、いくらフレキシブルになっても、自分の時間を削って作っているのと同じなので、根本的には解決しないかなと思います。大学スポーツは指導者に対して、対価を全く払って来なかったことが根付いてしまっています。例えば、我々がその職務として勤務時間に指導に当たるのも、外から誰かに委嘱して指導の対価を払うのも、人件費と考えれば同じことです。我々が働く時間をそちらに振り分けているだけの話です。結局、それをどちらかしない限りは、解決はしていかないのではないかと。時間を使ってやりがい搾取と言われるような状態、まさに高校・中学で起こっていることと同じような状態だと思います。これが根本的な問題なわけです。自分の時間は削るところがもうありません。

佐藤所長：佐々木監督がおっしゃったように、入職時に、「職員として取りましたよ」と理事の方から話をされるわけですね。でも心の裏を読めば、おそらくバスケットため、また馬術のためにも採用していると思うのです。その辺りを入職時や監督就任時に明確にして欲しいと感じました。それが明確であれば、我々も応援して職員の指導者と横の繋がりもできますし、UNIVASと言われる大学組織としての統括組織、スポーツ局の役割も明確になり、専修大学のスポーツが良くなります。素晴らしいお二方からそう感じました。

富川：お二人共通するところは、大学に頼らずご自身を信じて、やれることをやって今に至っている。西山監督からも出ましたが、このスポーツ研究所は専修大学の一組織でありまし

て、何かしら体育会の強化あるいは学生の育成に尽力したいと思うところがあります。何かコラボしてとか、こういうことをもう少し情報があったらとか、何かそういう希望とか、こうしたらいいというような、思いつくこととはありますか？

西山監督：もちろん沢山あるんですけど、伊勢原にまずはその所員の皆さんに視察などしていただくことでしょうか。おそらく馬術部と接する機会がほとんど無かったと思うので、まずは見ていただいて、学生の意見とか、どんなことをしているのか聞いて欲しいです。最初から決め打ちではなくて、交流をする機会を設けながら、ざっくばらんに話をし、いろいろな可能性を模索して「それは面白いじゃない」とか、「それでは一緒にやってみよう」、「これは授業の中でもできるよね」と、創発的なことができれば、一番理想的だろうと思います。

佐々木監督：私も思います。具体的などころがいきなりこう出るというわけではなく、まず風呂敷を広げてみて、今日のような形で我々の現状をお伝えさせていただく中で、ではこんなことできるのではないかと、そう言った可能性が一つ出てきてそれを膨らますというような、そういった機会がいろいろと増えていくと、できることが広がって行くのではないかとするのは凄く思いました。

佐藤先生：例えばバスケットボール部を野球部とかラグビー部とか駅伝部と同じようにしようとは、現在はしていないわけですよね？

佐々木監督：していないと思います。

佐藤先生：以前にスポーツ戦略委員会というものがあった、これまでとは違う考えでやりませんかという話があったのですが、それも立ち切れてしまった。大きなところからドーンと道を作るような、そういうことがこれから必要かなというふうに思っています。

佐藤所長：例えば今日、佐々木さんの方ではユニフォームに企業のロゴを付ける紹介がありました。レスリングでも企業から寄付したいと来ていますけれども、それをもらうこと自体、大変な事務作業が出てきたりする。すると「貰わない方がいいや」という方向になってしまう。その辺も単独ではなく、大学を含めて横のつなが

りを持ってできればいいでしょう。西山さんの方でもトレーニングや栄養データの可視化というところで、素晴らしい取り組みをされている。それが馬術部に留まらず、他の体育会の学生のコンディションの可視化にも応用していくとか。そういうアイデアを出し合えることで、今日はすごく良い機会だったと思っています。職員の方々や現場に関わっているの方々、その横の関係を密にしてやれば、またさらに研究所としてサポートできればと強く感じました。

西山監督：そうですね。あとは正課の授業で何かコラボができればとも思います。例えば馬を使った集中授業。これは可能性があると思っています。安全性の確保だとかいろいろ詰めるべきこともありますけども、セミナーハウスの近くにありますが、一般の学生はあそこに行く機会はありませんから、集中授業という形で見てもらえないかと検討いただきたい。あとは、融合領域科目の教養ゼミナールだとか、学際科目などもあり得ると思います。馬好き、競馬好きな学生など、馬事文化としてとかスポーツとしてなど、いろいろな視点・捉え方を学べる、まさに融合的な領域だと思います。そのように、正課と正課外と研究とをつなげていくことができたらと思っています。

齋藤先生：今の話、伊勢原で集中できないかなど、西山さんと何年前からいろいろな話もさせてもらっています。正課と正課外とを繋げる。保健体育部会とスポーツ研究所が間に入って、その教員が繋げている実際として、十数年前にまずSWPという形ができました。今ジャーナリズム学科に行って4年目で、伊勢原に学生皆で行って伊勢原に新聞を作るなど、いろいろトライアルして、実績を作っています。けれども何かやると何が引っかかってくるかという、大学の規則なのです。正課は正課で決められたルールがあって、正課外にもルールがある。例えば、新聞作成のために、伊勢原にジャーナリズム学科の学生を取材に行かせようとした時に、学外授業届というものを送さなくてはならない。今回の場合、コロナ禍でいろいろハードルがあって、ものすごく手間がかかる。「同じ学内に行くだけでしょ？」と話しをしたのですけれど、前例がないとか、かなり制度疲労を起こしている部分があることを、やりながら実感するのは。スポーツ基本法ができて、国全体のスポーツの考え方・制度が変わり、UNIVASもできて、という中で、うちの大学の中では昔ながらのやり方を踏襲しているような状況になっている。そのところを少し変

えていくといいのでは。学内にこんなに素晴らしい職員の方がいて、素晴らしいアスリートがいて、彼らを有機的に結びつけられれば、大学全体を盛り上げるように変わっていくのではないかと、自分はそういった気持ちがあります。今のルールの中で何とかやりくりして、家庭を犠牲にしがらやっていますけれども、そうではなくて、職員としての帰属が少し変わって、対価もあり職務としてもできるようになること。少し変えるだけで大きく変わる部分があると思って、今日の話を開かせていただきました。

富川：例えばですけど、なにか学生から、今すぐにでもできそうなこととか、こういうのがあったら良いなとか、こういう大学であったら良いなとか、こんな活動ができれば良いな、そういう声を何かお聞きしたりしていますか？

西山監督：学生からは欲があまり感じられないというのが、この半年ぐらいやっているとこです。本当はあるかもしれないですけど、それを伝えるような場面は少ないという印象です。大学生ならばいろいろなことを考えて、こうしたいとか、こうなりたいとか、そういう欲がもっとあっても良いと思うんですけど、あまり出てこないです。

佐々木監督：今うちはバスケットホールというものに関しては、結構、主体的にこうしよう、あぁしよう、選手たちが監督の言うことが絶対だということではなく言ってきます。こうした方がいと思うんですけどか、こういうものを使ったらどうですかとか、それはもう学生スタッフからも、「私、こういうことをやりたいのです」と言ってくる。その中の女子学生の一人が、「広報をやりたいので、インスタのアカウントとかティックトックとかでやらせてもらえないですか？」と、自分から企画書を持ってきました。私が責任を持つので「良いよ良いよ、ドンドンやっていこう」と。そういう責任を負うのが、監督だと思っています。そういうことで信頼関係が成り立ってくると、選手たちも「これがやりたい、あれがやりたい」という動きが少しずつ出てきて、それがやりがいに繋がります。自分たちが主役になって活動ができているという所に、すごく生き生きと、選手達、学生スタッフ達が、今やってくれていて良いなと思っています。

齋藤先生：Zoom参加の学生（近藤萌さん）から質問があります。仕事と監督業を両立されていて、もちろん大変と感ずることが多々あると

思いますが、学生と触れ合いながら成長を感じる時は、どのようなことがあるのでしょうか？自分自身が成長できているとか、学生の成長を見て感じるところとか、何かありますか？。

西山監督：出身大学で出身の部ですし、監督にでもならないとなかなか実際やってみるということはなかなかできないです。馬に乗ることだけであれば、乗馬クラブとかに行けばできます。けれども、大学の部を実際に動かすということは、おそらくなかなかできないので、それが貴重な経験ではあるかと思っています。

佐々木監督：ここ最近、監督として面白いと思えるようになったというのは、成長の証かなと思っています。それまでは何のためにやっているのだらうという所がすごくありつつでした。綺麗ごととかかもしれないですけど、選手たちが専修大学を選んでくれて、頑張る結果を出そうと毎日やってくれていることは、やりがいに繋がってはいるのですけれども、監督という立場で責任は重いですし、何かトラブルがあったら自分の責任ですし、何か対価があるわけでもない。家庭を犠牲にしつつということ考えると、マイナスしかないのではないかと、というような思いが出てきます。でもネガティブなことばかり言っている、人生面白くないですし、自分の監督のスタイルというのが徐々にできてきたので、それが形になって、結果になってくると変わってきます。今まで積み上げてきたものが、自分の中でも自信になりますし、疲れはあるのですけれども、やっているの面白みというのが、ここ最近少し感じられるようになったというのが、成長したのかなというふうに思います。

学生（山本稜弥さん）：大学職員だからこそ時間とか制約されるとは思うのですけれども、大学職員だから嬉しかったこととか、逆に良いこととかありますか？

佐々木監督：職員でのメリットは、リクルートの時に、大学の中のことがすごくよく分かっていることです。特に最初、私は二部事務課で教務経験をして、学部の内容とかを理解できて、次の入学センターでは入試のことや、大学の広報的な部分を知ることができて、現在のキャリア形成支援課というところでキャリア教育というものを職員としても学ぶ機会があったので、そういった職員という立場でなければ得られなかった知識から、対高校生、もしくは高校

生の保護者に、明確に伝えられます。専修大学はこういう大学で、うちに入れば私がこういう立場でサポートできますよということが言え、その高校生や保護者の方に対して、すごく信頼や説得力が生まれることがあったので、そこは職員という立場ならではあったと思います。

西山監督：大学の予算や補助に関してはやり易い面があると思います。強化部をサポートしてくれるが学内部署には、体育事務課を中心に、学生生活課や校友会、育友会などがあります。学外の監督・コーチだとおそらくこれらの部署の存在はあまりご存じないと思います。こういう部署で、どういう方がいて、どういう予算を持っていて、それをどうやって申請するのかということが職員であればある程度見当がつかます。それから、どういう手続きが必要で、誰がキーマンだということもある程度わかるので、困ったときの相談放送などもわかりやすいです。加えて、私は高等教育政策を踏まえた学内データの分析というのが現在の職務ですけども、国が大学に求める方向性や今の専修大学の現状とか、そういった教育機関としての評価や役割という少し広い視点から部活動を考えられるというのは、外部の指導者では難しいと思います。

富川：3日間集中授業でやっても、まだ足りないくらいで、いろいろな情報交換をさせて頂きました。我々も知らなかったことを知ることができたということが良かったと思います。決め打ちではなくて、できること、やれること、そこから何か手をつけていけないかという所を探していくということが、我々スポーツ研究所もすぐにでもできることではないかと思っています。

佐藤所長：佐々木監督、西山監督、本日はお忙しい中、本当にありがとうございました。今日のお二人の話を聞いて、こんなにスポーツに関して優秀な人材がいらっしゃったと、改めて感じさせてもらいました。他にもそういった職員の方々がいらっしゃるとは思いますし、その方々とこのスポーツ研究所と横の繋がりを一緒に持って、専修大学の体育会をより良くしていければと思います。同時に存在価値をどのように大学側に表していければ良いかということも、職員の方々と一緒に考えていければと思います。また今後もこのようなテーマに参加して頂ければ非常にありがたいですし、専修大学のスポーツを更に盛り上げられるように、一緒にやっていければと思っています。本日はどうもありがとうございました。